

国立国語研究所学術情報リポジトリ
国語研の窓 第39号 (2009年4月1日発行)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001922

国語研の窓

39号

平成21年4月1日 第39号 発行 独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集 国立国語研究所管理部総務課
普及広報担当グループ
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
電話 042-540-4300 FAX 042-540-4334
URL <http://www.kokken.go.jp/>

もくじ

暮らしに生きることは	1
研究室から :	
日本に暮らす外国人の日本語学習の環境改善をめざして	2
「感じのいい日本語」ってどんな日本語?	3
「言葉の質問室」の活動	4
お知らせ: 国立国語研究所の研究成果の紹介 (英文)	5
刊行物紹介:	
『新「ことば』シリーズ22「辞書を知る』	5
『「病院の言葉」を分かりやすく—工夫の提案—』	6
『日本語ブックレット2007』	7
新刊	7
「ことば」フォーラム報告	8



国語研究所の桜

暮らしに 生きる ことば

サハリンで聞いた日本の流行歌

“泣くな妹よ 妹よ泣くな 泣けば幼い
二人して 故郷を捨てた 甲斐がない”

昭和12年にヒットした「人生の並木道」をはじめて聞いたのは、平成16年にサハリン州ポロナイスク市で調査をした時でした。この流行歌を歌ってくれたのは、日本人がサハリンの南半分に多く住んでいた時代に日本語を身につけたウイルタ人でした。日本の歌が好きで、この他にも「湖畔の宿」など、当時の流行歌を聞かせてくれました。

このウイルタ人は敷香町(現在のポロナイスク市)にある「敷香教育所」に通っていました。この教育所では、日本語とウイルタ語による授業が行われていました。日本語教育の現場でウイルタ語が用いられたのは世界的に見ても極めて珍しいことです。これは、ウイルタ人の民俗文化について研究をしていた川村秀弥先生がこの教育所で教鞭をとっていたことによります。またこの教育所には、ウイルタ人の

他にニヴフ人も通っていました。その当時、日本語が彼らの間の共通語となっていたようです。

彼らの使う日本語には、いくつか特徴があります。例えば、「ツ」が「チ」に変わる現象(例:「クガツ」(9月)が「クガチ」になる)のように、ウイルタ語の影響を受けたものがあります。ウイルタ人が歌ってくれた「人生の並木道」にも例えば「ナクナ」が「ナグナ」になるように、力行子音が濁音になる現象が観察されます。これは、東北地方や北海道の海岸部などで見られる特徴です。このように、現在までサハリンで使われ続けてきた日本語には、今でもその当時の特徴を垣間見ることができます。

しかしながら、この日本語が使える話者は、年々少なくなっています。あと30年もすれば、その日本語を耳にすることができなくなることが予想されます。この流行歌を聞かせてくれたウイルタ人も、昨年他界しました。当時の流行歌が聞けるのは、今では調査で用いたテープだけです。サハリンに根付いてきた日本の言語文化がなくなってしまう前にすべきことは数多くあります。

(朝日 祥之)

日本に暮らす外国人の日本語学習の環境改善をめざして —学習項目グループの取り組み—

在住外国人の増加

「国語研の窓」をお読みのみなさんのほとんどは、現在、日本で生活をしている方々だろうと思います。その前提で話を進めますが、みなさんは、この数年の間に、日常生活の中で接する外国人が増えたような気がしませんか。たとえば東京では、電車に乗っていても、街を歩いていても、毎日のように外国人を見かけます。また、姿を見ることが仮になかったとしても、実は、携帯、テレビ、車などを作る工場で仕事をしている外国人も少なくありません。海外からの介護士・看護師の受け入れも進んでいますので、日本の社会は外国からやってきた人々によってかなりの部分を支えられているのです。

現在、日本には約215万3千人（2007年12月末の外国人登録者数、法務省調べ）の外国人がいます。これは、日本の人口の1.69%にあたります。日本に住む外国人の数は年々増加の傾向にあり、今後も減ることはないと言われています。

在住外国人の日本語学習支援における課題

では、日本に暮らす外国人の日本語はどうでしょうか。流暢に日本語を使いこなす人がいる一方で、日本に10年以上暮らしているのに、自己紹介程度の日本語しかできない、という人もいます。同国人の多い地域に住み、職場では日本語能力が特に求められず、日々、自宅と職場の往復をしている、そのため、日本語を使う必要もなく、学習する機会も持たないまま、何年もすごしているという人がいるのです。こういった人たちには、日本社会に関する知識を十分に持たない場合も少なくなく、その結果、災害や病気といった状況の際に、迅速な対応ができないという事態に陥る恐れもあります。

このような状況を生み出した原因の一つに、日本の社会が、就労や結婚のために来日した外国人に対し、日本語や日本に関する学習の機会を保障してこなかったこと、学習の動機付けをし、学習を促進するような環境を整備してこなかったことが挙げられます。日本語が使われている環境にいれば、日本語は覚えられると考えられがちですが、基礎的な日本語も知らない人にとっては、日本語が使われている環境の中に身を投じ、ちょっとした用事を足すことすら困難です。にもかかわらず、こういった人たちに対する日本語教育は、主に地域のボランティアによる日本語教室に任され、学習の保障

はなされませんでした。

また、生活や社会に焦点を当てた教材があまりないこと、その教材を作成する際に必要となる、学習項目あるいは学習目標の一覧がないことも大きな問題です。一覧があれば、教材開発の助けになるでしょうし、学習者自身が学習の計画を立てる際の拠り所とすることが可能です。

課題を解決するために

以上のような発想で、日本語教育基盤情報センター学習項目グループは、「日本語教育における学習項目一覧及び段階的目標基準の開発」というプロジェクトを立ち上げ、これまでの3年間、「生活のための日本語とは何か」を明らかにするという課題に取り組んできました。

課題追求のため、私たちは大きく二つのことを実施してきました。一つは、移民の受け入れの歴史が長い国々で、「生活のための言葉」はどう捉えられているかを調べることです。その中には、日本国内のもの、長年の調査研究及び教育実践によって培われた中国帰国者向けの日本語教育なども含めました。もう一つは、外国人がどういった場面でどんな日本語を使っているのか、どういった日本語を学びたいと思っているのかを調べることです。これらにより、最終的には下に示したような一覧を作成することを計画しています。

尚、このプロジェクトの成果は、文化庁文化審議会国語分会日本語教育小委員会が2009年1月に指針として発表した「『生活者としての外国人』に対する日本語教育の目標及び標準的な内容」にすでに生かされています。
(金田智子)

「生活のための日本語」

テーマ	場面	言語行動	要望／難易等	スキル／サブスキル	知識	語彙	言語表現
教育	中学校	子どもの担任と進路について相談をする	（使用実態調査の結果に基づいて） （使用実態調査の結果に基づいて）	読む／手紙；情報を得るために読む、指示を読む、書く／申し込み用紙；名前を記入する、希望する日時に印を付ける会話／情報を要求する、情報を提供する、助言を求める、希望を伝える	日本の学校体系、高校の種別、入試制度、授業料、奨学金制度…	高校、普通高校、商業高校、商業科、工業高校、工業科、通信制、定時制、公立、私立、付属、受験、入試、内申書、筆記試験、面接…	
教育	中学校	高校入試説明会に参加する		読む／配布物；情報を得るために読む、指示を読む、読む聞く／配布物を目で追いながら、説明を聞く、聞く／指示を聞き取る	日本の学校体系、入試制度、授業料、奨学金制度、推薦…	高校、普通高校、商業高校、商業科、工業高校、工業科…	○実際の接觸場面（日本語非母語話者と母語話者、非母語話者同士のやりとりの場面）で収集したデータ。 ・音声、映像 ・ストラテジー ・非言語行動 ・評価データ 等

「感じのいい日本語」ってどんな日本語？ — 「外国人の日本語」に対する日本人の評価 —

1. 「評価」とは？

私たち日本語教育基盤情報センター 評価基準グループでは、「外国人の日本語」に対する日本人の評価について研究を進めています。「評価」というと、テストや学校の成績のことを連想する人も多いでしょう。しかしここでいう「評価」とは、「あとの人の話し方は感じがいい」「あとの人の書く文章は分かりにくい」といったような「感じ方」までを含むものです。

2. なぜ日本人の評価を調べるの？

最近日本国内では、日本語を使って生活する外国人が増えており、これに伴い日本人側にも、「外国人の日本語」に接する機会が増えてきています。

「外国人の日本語」は、当然「日本人の日本語」とは違います。そして、そうした聞き慣れない・見慣れない日本語に接したとき、一人ひとりの日本人が「どう感じるか」ということについては、非常に大きな個人差があるのではないでしょうか。例えばAさんは、外国人の「敬語の誤り」について、気にならなくなってしまうがない、という反応を示す一方で、Bさんは、話し手が外国人だということを考えると、敬語が多少間違っていても全く気にならない、と言うかもしれません。

こういう個人差を踏まえ、日本語教育の立場としてはどう考えるべきでしょうか。敬語の間違いを非常に気にする人は確かにいるのだから、敬語教育はしっかりと行うべき、ということになるのでしょうか。あるいは、日本語の敬語習得は非常に難しいのだから、多少間違っても気にしないよう、日本人側にも働きかけるべき、ということになるのでしょうか。

私たちの考え方こうです：評価の際、敬語の誤りを重視することも、あまり重視しないことも、それは個人の自由であり、他人からとやかく言われることではない。ただ、自分の評価のやり方だけが絶対ではなく、他の人はまた違ったやり方で評価をしているかもしれない、ということに気づく必要はある。そして、自分の評価のやり方は本当にこれでいいのか、ということを、一人ひとりの日本人が自ら問い合わせるようになることが大切である。

3. 外国人の日本語に対する日本人評価の実態は？

上記のような考え方に基づき、評価基準グループでは、外国人の日本語（まずは書き言葉）に接し、評価するとき、一般の日本人が(1) どういう観点を

使っているか、(2) 観点同士にどのような優先順位をつけているか、(3) 観点の選び方にどのような傾向があるか、等のことを調べています。具体的には、外国人が同じ課題で書いた複数の作文を一般の日本人に読んでもらい、「いちばん感じがいいもの」から「感じが悪いもの」まで順位をつけてもらった後、どういう理由でその順位を付けたのか、ということについて、アンケートやインタビューで答えてもらう、ということをしています。

これまでの調査で、外国人の日本語に対する日本人の評価態度はまさに十人十色であることが分かっています。評価において、日本語が巧みに使われている、ということを最も重視する人もいれば、内容がよければ日本語の巧みさはほとんど気にしない、という人もいます。また、文章として表現されたことを評価するのではなく、その文章を書いた人がどのような人柄を持っているかを推測し、それを評価しようとしている人もいました。さらに、個人的には「日本語の巧みさ」という点に非常に心惹かれつつも、しかし書き手が外国人であるということを考慮して、その点についてはあえて考慮しないでおこうと努力されている人もいました。どの評価態度も共感できるところはあり、「外国人の日本語はこのように評価すべきだ」と決めてしまうことがいかに無理な話であるか、ということが強く感ぜられます。

4. 研究が目指すもの

日本人は学習者に接するとき、日本語能力の点では自分の方が優位に立っているため、無意識のうちに相手を「上からの目線」で評価してしまいがちになります。それでは対等な人間関係は生まれません。日本人と外国人が、日本語を使ってよりよい人間関係を作っていくためには、日本人自身が、自分自身の評価のあり方を自覚し、それを見直していくことが必要だと私たちは考えています。

つまり私たちの研究は、外国人の日本語能力を向上させるためのものというより、日本人の、外国人との「お付き合い能力」を向上させるための研究であるといえるのです。

私たちの研究成果は、以下のwebページから公開しています。一度ご覧になってみてください。

<http://www2.kokken.go.jp/eag/>

(宇佐美 洋)

「言葉の質問室」の活動

国語研究所の電話応対とは

平成20年度までは「国民一般からの言葉に関する電話質問等への対応を実施する。」（中期計画）として、情報資料部門電話応対グループが質問に対応し、その様子を記録・蓄積するとともに、ウェブ上（国立国語研究所「日本語情報資料館」）に「言葉の質問室」というサイトを開設していました。現在はいわゆる「FAQ」（よくある質問とそれに対する回答）に絞って掲載しています。ここでは、これまでのグループの活動状況について報告します。

日々の質問応対では、以下の点を基本としていました。

- ①「ことば（国語・日本語・言語）」の質問
- ②「ことば」の科学の立場からの回答・対応
- ③質問者と質問内容の二面から記録を蓄積

これに加えて、回答内容の再利用（すでに行なった回答の中から、どういう内容が利用できそうか、また実際に何を利用したか。）と参考資料（答える時にどういう資料を参考に用意したか、また実際に何を提示したか。）に関する情報の整備や、記録の拡充をすすめました。蓄積した記録を有効に活用するとともに、回答自体の均質化を図るためです。

質問の件数

さて電話対応件数は、5年前と比較すると、約1.5倍に増えています。

平成 19年度	1,928件
18年度	1,883件
17年度	1,699件
16年度	1,594件
15年度	1,476件
14年度	1,227件

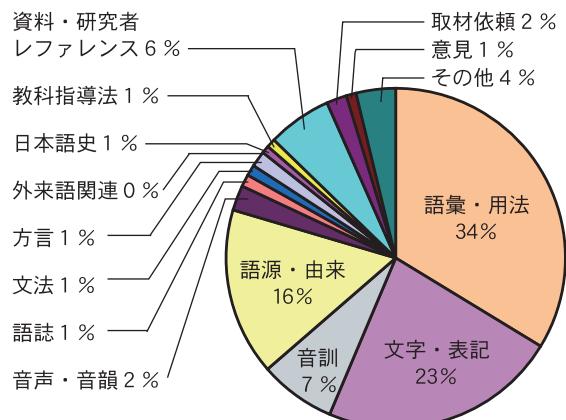
質問者の属性

近年5年間に、どういう人が質問をしているのか、見てみると、役所・学校、マスコミを含む組織からの質問は4割で変わりませんが、当初半数近くだった個人の質問者が、半数を超え、増加傾向にあります。一方、特にマスコミ関係の中でも番組制作関連の質問が、一時期非常に増加したことがあります。

質問の内容

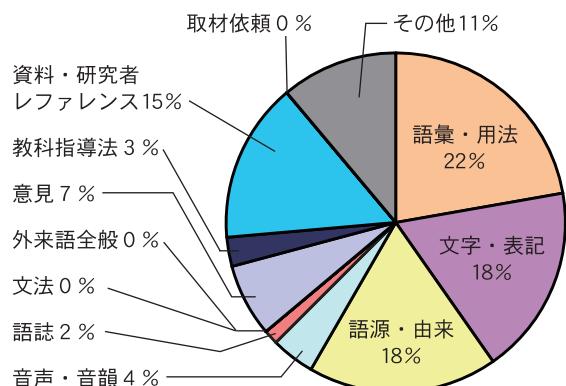
質問内容は、語彙用法に文字表記が続き、合わせて半数以上になります。これには年度ごとの変化はありません。ただし「ことば」に関する質問内容は

2007年度電話質問の内容



多方面にわたり、複雑なので、単純な分類は不可能です。「外来語に関する質問」といった別の視点を設けると、2007年の「外来語言い換え提案」の終息とともに質問数の沈静化が見られるようです。一方外来語に関する質問の内容面をみると、質問全体と同様に、語彙用法と文字表記が拮抗していて、それらを合わせると4割になります。またさらに語源由来を加えると全体の7割を超える、というのも質問全体の傾向と同様です。外来語については何をききたい、といった格別の傾向はない、ということが分かります。

2007年度外来語関連質問



文化審議会答申「敬語の指針」が出された平成19年以降、外来語同様に「敬語に関する質問」といった視点から観察してみる必要もあるようです。「ことば」の質問にあらわれる問題は、国語施策や社会における国語問題への意識や关心と関連づけられるものかもしれません。

（山田 貞雄）

刊行物紹介：『新「ことば』シリーズ22「辞書を知る』

新「ことば」シリーズは、世の中で関心の高い言葉の問題を取り上げ、専門家による的確で分かりやすい解説を加えた一般向けのブックレットです。今回のシリーズ22では「辞書」をテーマに取り上げました。

辞書は新「ことば」シリーズ5「辞書」（平成8年）でテーマに取り上げられています。しかし、言葉をめぐる状況は時代とともに変わります。辞書もその例外ではありません。同じテーマであっても、自ずと取り上げ方が変わります。

最も大きな出来事は電子辞書の普及です。辞書は元々私たちにとって最も身近な言葉の情報源でした。ただ、一定以上の語数の辞書となると持ち運びが不便で、辞書を引きたいと思っても手元に辞書がないことがよくありました。たくさんの語の中から調べたい語を探し出すのもなかなか面倒な作業でした。

それが、電子辞書の登場により、「その場ですぐに辞書を引く」「調べたい語をすぐに見つける」ということが以前よりも容易にできるようになりました。辞書の「言葉のツール」としての利便性が格段に増したわけです。学校の授業でも、多くの学生や生徒が電子辞書を机の上に置き、分からぬ言葉があればすぐに辞書を引いています。

このような状況をふまえ、今回のシリーズ22『辞書を知る』では、辞書の「言葉のツール」としての役割を前面に出し、「世の中でどのような辞書がどのような目的で作られているか」、また「辞書の作り手・使い手が何を考えて辞書を作ったり使ったりしているか」を広く知っていただくことを意図して編集しました。

巻頭エッセイでは、井田由美氏（日本テレビ）にアナウンサーと辞書とのかかわりについて紹介していただきました。

第1部「座談会：いまどきの日本語・いまどきの辞書」では、日本語研究者であり、辞書編集の経験も豊富な北原保雄氏、山口仲美氏に、辞書と現実の日本語との微妙な関係についてお話しいただきました。

お知らせ

国立国語研究所は、創立以来の研究成果の概要を英文で紹介する冊子を、10周年ごとに作成・増補改訂してきました。昨年12月に創立60周年を迎える、第5版を作成しました。

An Introduction to the National Institute for Japanese Language: A Sketch of Its Achievements

PDF版を国語研究所のホームページ上でご覧になれます。

<http://www.kokken.go.jp/intro-nlri/>

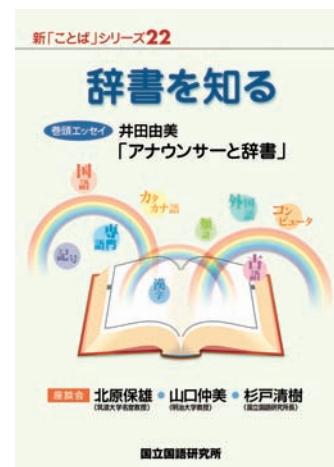
第2部「解説」では、辞書編集の最前線で活躍されている飯間浩明氏と矢澤真人氏に、それぞれの立場から、辞書編集の舞台裏やこれからの辞書のあるべき姿について書いていただきました。

第3部「辞書のいろいろ」では、「国語辞典」「時代別国語辞典」「方言の辞書」「発音の辞書」「専門語の辞書」「外来語・カタカナ語の辞書」「日本語を学ぶための辞書」「コンピュータの辞書」など、23種の辞書について紹介を行いました。

本書を通じて、辞書の多様性、そして辞書作り手・使い手のかかわり方の多様性の一端に触れていただき、「言葉のツール」としての辞書をさらに身近なものに感じていただければと思っています。

『新「ことば』シリーズ22「辞書を知る』

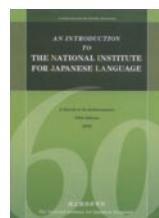
- ・巻頭エッセイ 「アナウンサーと辞書」（井田由美）
- ・座談会「いまどきの日本語・いまどきの辞書」（北原保雄、山口仲美、杉戸清樹）
- ・解説「辞書は何のためにある」（井上優）、「辞書の記述の舞台裏」（飯間浩明）、「バリアフリーの国語辞典」（矢澤真人）
- ・辞書のいろいろ（国語辞典、発音の辞書、コンピュータの辞書など23種の辞書の紹介）



A5判128ページ、2009年3月、ぎょうせい、税込500円

本書は一般書店で購入できます。

(井上 優)



刊行物紹介：『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案一』

国立国語研究所「病院の言葉」委員会（委員長：杉戸清樹所長）は、患者にとって分かりにくい「病院の言葉」を分かりやすく伝える工夫を、医療者に対して提案しています。この「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」については、昨年10月に中間報告を発表した際に、その概要について紹介しました（本紙第38号）。

医療の専門家と言葉の専門家とからなる委員会では、まず、医療者や国民一般を対象とした意識調査を行って、医療者から患者への説明に用いられる言葉が伝わらない原因を探りました。そして、その原因に応じて分かりやすい言葉遣いを行う工夫の方法を、下の三種五類に類型化しました。各類型を代表できる言葉を全部で57語選び、患者に伝わりやすい説明の工夫や注意点を、事例として示しました。

類型A	日常語で言い換える	「寛解」など
類型B	明確に説明する	
(1)正しい意味を		「腫瘍」など
(2)もう一步踏み込んで		「化学療法」など
(3)混同を避けて		「合併症」など
類型C	重要で新しい概念の普及を図る	「インフォームドコンセント」など

中間報告には約900件の意見が寄せられましたが、その多くは、提案の方向や枠組みに賛同するもので、95%以上の人人が提案は参考になると回答しました。中には、細部の記述に改善案を示すものもあり、それらは委員会で再検討して、より分かりやすくなるように修正しました。その結果を最終報告として、この3月に発表しました。

最終報告書は、意見を寄せてくれた機関や個人に送付し、ホームページでも公表しましたが、より多くの医療者や、医療の言葉に関心を持つ人たちに提案を役立ててもらうには、書籍にして市販することが効果的だと考えました。最終報告書をまとめる作業と並行して、提案内容に基づきながら、独自の企画も加えた書籍『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案一』の編集作業を進め、最終報告の発表と同時に刊行しました。

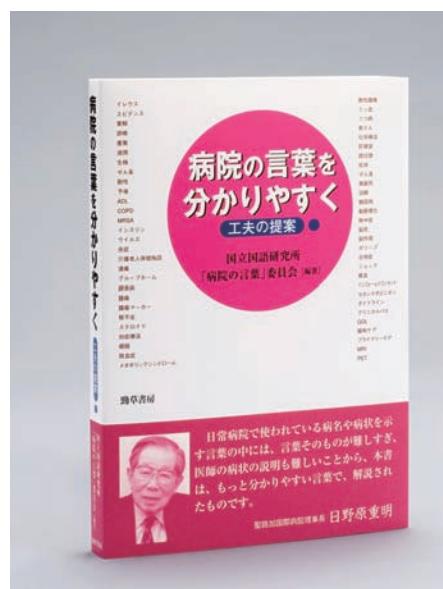
この本は、提案で取り上げた57語の工夫の例を、見開き2ページから4ページ程度の、見やすいデザインにまとめました。そして、紙面の随所に、患者への説明に用いることのできる挿絵や、患者とのコミュニケーションに役立つコラムを、入れました。これは、中間報告に対する意見公募のアンケートで、提案をよりよいものにするにはどうすればよいか、という質問を行ったところ、挿絵を入れてほしい、

コミュニケーションの問題を取り上げてほしいという要望が特に多かったことを踏まえたものです。挿絵は14箇所、コラムは30編になり、委員が分担したり共同したりして作成と執筆にあたりました。コラムの表題をいくつか挙げると、次の通りです。

患者はどう呼ばれたがっているか
説明したつもり、理解したつもり
医師の説明<悪い例・良い例>
不安の克服と信頼関係の構築
医療用語と漢字の難しさ
医者と患者の「溝」
誤解のいろいろ
患者も知る意欲を持ってほしい

この本は、まず誰よりも医療者に読んでいただきたいものです。患者に説明したり、患者向けの文書を書いたりするときに、この本に示す類型とその事例を参考に、多様な医療場面、多様な患者、多様な言葉に応用して、医療者一人一人が言葉遣いを工夫してほしいと願います。そして、患者やその家族など、一般の人にとっても十分理解できる内容ですので、医療における言葉やコミュニケーションに関心のある人々にも、広く読まれれば幸いです。

（田中 牧郎）



編著者：国立国語研究所「病院の言葉」委員会

出版社：勁草書房

2009年3月、A5判264ページ、税込2,100円

問い合わせ先：勁草書房03-3814-6861

「『病院の言葉』を分かりやすくする提案」ホームページ
<http://www.kokken.go.jp/byoin/>

『日本語ブックレット2007』 http://www.kokken.go.jp/nihongo_bt/

Webブラウザで閲覧できます。また、PDF版をダウンロードして閲覧することもできます。

『日本語ブックレット』は、日本語に関する動向や資料を分かりやすい形で広く提供することを目指し、平成17年度より毎年、電子版として定期刊行しています。



今回刊行した『日本語ブックレット2007』は、図書、総合雑誌記事、新聞記事といった3種類の資料をもとに、平成19年（2007年）の日本語をめぐる動きをまとめたものです。第1部＜動向＞では、3種類の資料それぞれについて、2007年1年間の日本語をめぐる状況・傾向を全体的に記述し（概観）、その中からトピックを取り上げて、より詳しく述べています。さらにそれぞれのトピックに関する図書や記事の情報を、第2部のデータから抽出して、関連文献情報として示しました。また第2部の〈文献一覧〉では、3資料の文献データを一覧することができます。さらに文献検索では、既刊分と併せて2005年から2007年までの3資料の文献データを横断的に（または、資料を選択して）自由に検索することができます。

それでは、実際に2007年の動向を見てみましょう。まず、3資料全体を概観します。毎年刊行されてきた新語・現代語辞典3種のうち2種が休刊するなど、電子辞書・ウェブ辞書の普及による書籍体の辞書の苦境が続いている一方で、総合雑誌・新聞でも今後の展望などが論じられました。その一方、新潮社編刊『新潮日本語漢字辞典』（9月）、小野正弘編『擬音語・

擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館・10月）といった、内容のユニークさで注目を集めた書籍体の辞書もありました。さらに『広辞苑』第6版（岩波書店）の刊行が発表される（10月）と、「いけ面」「顔文字」「ニート」等の新設項目などの話題が総合雑誌・新聞に加えて幅広いメディアをにぎわせました。

このほか、ベストセラーに名を連ねたケータイ小説についても、その文体などが話題となりました。さらに、『カラマーゾフの兄弟』（光文社古典新訳文庫）の人気に代表される西洋文学の新訳ブーム、Googleの書籍検索サイト「Googleブック検索」の開始とそれに対する慶應義塾大学図書館の協力表明（7月）も注目されました。

次に資料ごとに見ていきます。図書では、500円玉一枚で買える「ワンコイン本」のうちで「国語力」を書名にうたったものが人気を博しました。また2006年10月に死去した白川静氏の業績の影響もあって、漢字の成り立ちに関する本が相次いで刊行されました。さらに文化審議会国語分科会敬語小委員会の答申『敬語の指針』（2月）が敬語の5分類案などで大きな話題を呼んだのも手伝ってか、敬語の使い方に関する本が多く出ています。

総合雑誌記事では、この世代の読者が多いこともあり、特集の中で団塊世代とその言語生活に関連する記事が多く掲載されていました。昭和時代への回顧も特徴的であり、昭和期、特に団塊世代が生きてきた戦後の言葉を扱った記事が多く見られました。

新聞記事では、図書館の使われ方・機能の広がりに関する記事や、裁判員制度の導入（2009年5月）をにらんだ法廷用語に関する記事が目立ちました。また朝日・日経・読売の3社による共同サイト「あらたにす」の開設（2008年1月）が発表されるなど、ウェブ版との連動が進む一方で、朝日・毎日・読売の各紙がそれぞれ文字を拡大した紙面への移行を打ち出すなど、紙媒体での新たな動きも見られました。

（新野 直哉）

新刊

『教育基本語彙の基本的研究－増補改訂版－』（国立国語研究所報告127）
2009年2月／明治書院／A5判横組み571ページ／税込15,750円

『新「ことば」シリーズ22「辞書を知る」』
2009年3月／ぎょうせい／A5判横組み128ページ／税込500円

『病院の言葉を分かりやすく－工夫の提案－』
2009年3月／勁草書房／A5判横組み264ページ／税込2,100円

『日本語科学』第25号
2009年4月／国書刊行会／B5判横組み173ページ／税込3,150円

「ことば」フォーラム報告

第35回「ことば」フォーラム 病院の言葉を分かりやすく

後援：東京都医師会・東京都薬剤師会・東京都看護協会

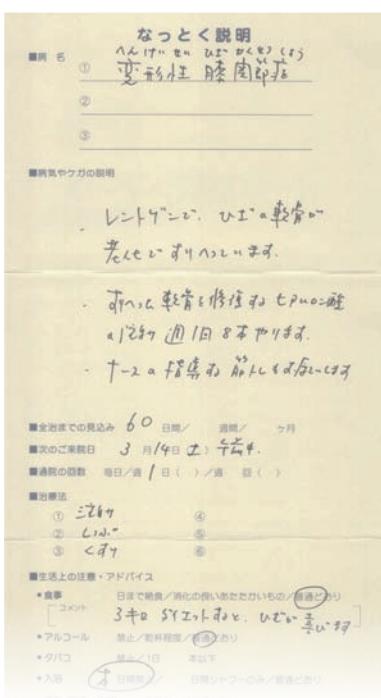
天候に恵まれた3月7日（土），国立国語研究所講堂において、「病院の言葉を分かりやすく」をテーマに開催しました。今回のフォーラムでは、国立国語研究所「病院の言葉」委員会が活動を行ってきた『病院の言葉』を分かりやすくする提案の最終報告を発表し、3人の委員が日ごろの医療や活動の取り組みを講演し、会場いっぱいの約180名の参加者とともに医療におけるコミュニケーションの大切さについて考えました。

はじめに、今回の提案の実務的なとりまとめを担当した田中牧郎（国立国語研究所）が、提案の概要を報告しました。患者中心の医療の広まりによって患者にとって分かりにくい医療用語が問題になってきた背景や、患者に言葉が伝わらない原因を分析するために実施した調査について説明しました。そして、医療者一人一人が言葉遣いを工夫することによって問題を改善していく基本的な考え方を提示したものが、今回の提案であることを述べました。

次に、「診察室のやさしい言葉」という講演を行った矢吹清人医師（宇都宮市・矢吹クリニック院長）は、「大きな病院には絶対なく小さな診療所に必ずあるものは？」という謎々から語り始めました。謎々の答えは「狭さ」。患者との距離が近いことが優しさにつながるというのです。言葉遣いの癖などをと

らえて「患者の言葉」で話す効用や、良い検査結果が出たときはともに喜ぶことの大切さなどを述べました。そして、骨折の説明に使っている割り箸や、病気の見通しや注意点を書いて患者に渡す「なっとうく説明カード」など、自ら編み出した道具を紹介しました。

さらに病院勤務医の立場から、三浦純一医師（福島県・公立岩瀬病院医局長）が、「患者を支える医師の言葉」について講演しました。がんなどの重い



島県・公立岩瀬病院医局長）が、「患者を支える医師の言葉」について講演しました。がんなどの重い



病気の患者との会話は、普通ではない緊張した場面が多いとして、不安や恐怖などで様々に揺れ動く患者の心に応じて、医師が率直にすべてを話すことが効果的な場面と、遠回しな婉曲表現が必要な場面があることを、ポライトネス理論を用いて説明しました。がんの告知から始まり、「ご臨終です」という重みを持った言葉で別れを告げるまで、患者と医師のコミュニケーションの工夫を述べました。

患者を支援する活動を行っている和田ちひろ委員（いいなステーション代表）は、患者の視点から考えていることを話しました。まず、37の患者支援団体の協力を得て行った、理解できなかった言葉の調査結果を紹介し、「みんぜん（眠前）」（寝る前）、「ひふくぶ（肺腹部）」（ふくらはぎ）といった耳で聞くだけでは分からぬ言葉など、国語研究所の調査では得られなかつた多くの事例を示しました。そして、医療者に任せる医療から、患者も自分で勉強する時代になったとして、患者用図書館などを整備していく必要性を述べました。

全体討議では、司会の吉岡泰夫（国立国語研究所）から救急隊員による一刻を争う場面で短時間に的確な説明を行う方法を問う質問が紹介され、三浦委員が、放置するとどうなるかを分かってもらい、すぐに処置を行う必要性を理解してもらうことの大切さを述べた上で、色々な場面を想定した問答集を作つておくことが有効だと助言しました。また、患者の心の動きに配慮したコミュニケーションをどう取るかというテーマの討議では、矢吹委員が、医師と患者はダンスを踊るようなもので、医師が少しリードしつつ、一緒に付いていることが大事であると述べました。

予定時間を越えた約3時間のフォーラムは熱心な参加者の盛大な拍手と共に閉会しました。なお、当日、先行販売された『病院の言葉を分かりやすく－工夫の提案－』（勁草書房）に多くの方が関心を寄せており、印象的でした。

（田中 牧郎）

